

今やつてることを全力でやってたなら、きつとまた振

り返った時によかったって思えるので

語り手 嘉本 梨奈（高校六期生 大学職員） 聞き手 嶋本 結衣

―机とかがやっぱり変わってますか？

机こんなじゃなかったです。木の、机も椅子も木の椅子でした。

―引き出しとか。

引き出し、引き出しというか、ここに確か入れるものはありました。

教科書とか。

―多分、このMacBookとかで、置くところが多分ないから、もうこの正方形みたいになって、今多分これに揃ってるんですよ。全部。

へえー。もうみんなMac持ってるん？

―みんな持ってます。

入る時から？ 入学？

―はい、もう入学する時にiPadとMacはどっちとも買ってみたくな。

*

高校生時代

―高校から入られたんですか？

高入生かな。高校から。

―なんで入ろうと思ったんですか？

私も部活で。私、バトントワリング部だったんですけど、それでまあやりたいなっていうのと。まあ大学もバトン部に行きたかったなという

のがあって。そう、高校から受験……大阪なんですけど、滋賀まで通うの大変だったんですけど。部活かな。やりたいなと思って。

―すごい大阪のどこの？

大阪の吹田っていうまあ、大阪の大学で言ったら茨木キャンパス……。

―ああ、わかりました！え、遠いですね。今も大阪とか兵庫とかから来る人いるんですけど、情報って届くもんなんですか？

あーその立命館っていうところに行きたいなつてのがあったのかも。だから宇治とかもあるじゃないですか、京都のことかもどっち行こうかなみたいな感じはあったかもしれないです。

―でも立守やったんですね。

立守の方が、滋賀の方が早く受験があつて、そうそう。なので、先に受験をしたい……。

―確かに（笑）

そうそう、早く終わらせたいなみたいなもあつて。

―バトントワリングのために来たつてことですよ。

高校はそうかもしれない（笑）

―ええ、すごい。考えられない。バトンつてそんな時から厳しかったんですか？

結構厳しかった。やっぱ今も厳しいイメージ？

―今も。はい。やっぱり強化部なんで（笑）。しかも高入生やから、その時も中入の人とかもいはりましたよね。

いたけど、中学校もバトン部あるけど、そんな時はなくて、高校からしかなかった。

―じゃあ友達とかも一から作るじゃないけど、みんなが……。

そうですね。そうそうそうそう。

—今もその高校時代の人と関わりとかはあるんですか？

あるあるある。同じ同級生とかは結構会ったりしたり。

—へえー。やっぱり練習とかもきつくて。

うん、そうね。その当時はやっぱり練習とかもきつかったから、もう練習終わってクタクタで家帰るみたいな感じで（笑）。全然、みんなでご飯食べに行くとかも、そんなしてたような記憶ないけど。まあそうやって、卒業してから思い出話として大変やったよねって言いながら、またそのバトン部のみんなとは繋がったりとかはあるんで。

—バトンがやっぱりその高校の中で一番の思い出というか、そういう感じですか？

そうやね。部活やりたいなと思ってきたんで。で、しかも、それこそ文化祭とか。入学式とか、卒業式は、あったかな？ そういうところで、発表できる場が結構あったから、バトン部が。そういうのでみんなに見てもらえるっていう、場所があったので。で、しかも、普段一緒にみんな生活してる子ね。学校生活一緒にしてるみんなに、その自分たちが頑張ってることを見てもらえる場があるっていうのは、すごく楽しいなって思います。

—すごいですね。人前に立ってやるっていうのがすごく難しくて、自分の中で（笑）。でもそういう、人前に立つのが苦手とか、そういうのなかったんですか？

でも今もそんな得意ではないかも。うふふ。バトンは、踊ったりとかですけど。それこそ、プレゼンテーションしたりとかね、そういう場もいっぱいあると思うんですけど、全然そういうのは、社会人になって、仕事の場でもやっぱりあるんやけど、全然苦手ではあるから（笑）。

—大変ですよ（笑）。でも、やっぱりバトンでそういう経験があるって、人前で喋るってなった時に、踊ったりすることとまた違うと思うけど、それで力がついてる部分ってのはありますよね。

確かに、そうやって、度胸じゃないけど、気持ちの面で楽しくとか、喋ることはすごい苦手やと思うけど、前に立つ緊張はやっぱりするけど、何回もやると慣れてはくるかなっていうのはありますかね。すごい得意そうに見えるねって言われるけど、自分の中では全然めっちゃ緊張してます、みたいな感じですよ。

—ええーそうなんですか。やっぱり言われるんですね。得意そうって。やりなよって感じで（笑）。苦手だなと思うけど。でも、高校とかでそうやってやってきた経験は全然活かされてるかなとは思いますが。—今のお仕事って……。

仕事は、その大学、立命館大学で今事務職員、職員として働いてて、その大学の職員ってすごい色々あるんですけど、私は今、これっていうのがすごい難しいんですけど、それこそ企業の方、会社に勤めてる方とか、会社の課題とか、社会の課題、例えばSDGsだったりとか、そういうものを何か抱えてる会社と、大学生の何か社会のために取り組みたくなって思ってる人たちを繋げて、一緒に課題解決していくようなものの、まだ私たちが解決するというよりは、それをみんなが解決していくまじょうっていう、仕組みを作ってるみたいな。難しいんですけど（笑）。

—難しいですね。すごい。大学でそんな企業さんに関わるってことがあるんですね。

そうですね、やっぱりみんなも社会人になって、いろんな企業さんとか社会に出て、いろんな人に多分関わっていく中で、急に四年生になっ

てはい就職ですって言うて関わるよりかは、むしろ全然、高校生だとしても、企業さんと関わることで多分色々自分の興味も湧いてくるやろうしっていうことを大学と一緒に今やってみたいなイメージ。
—へえすごいですね！そんな仕事があったんや。

大学生時代

—梨奈さんは食べ物のことで栄養価を調べたくてスポ健に入ったんですか？

最初からそこについていうふうに思ったというよりかは、じゃあ大学行きます。スポーツ健康科学部あります。経営学部とかあります。例えば薬学部とかあります。あとね、文学部。グローバル系の学部があります。ってなった時に、まずその進路の選択する時に、どの分野だったら自分が取り組みやすいかなって考えた時に、やっぱり自分もスポーツというか、やってたし。とっつきやすいなと思ったのが、まずこのスポーツだったっていう感じですかね。

で、そうやって、自分もスポーツって、ただするもんかなって思ってたけど、大学入って、いろんな分野を知って、学年上がるにつれて、自分の興味が。やっぱり食べ物も好きやし、それこそ自分はまだ大学でバトン部もやってたんですけど。その食べ物で、そのパフォーマンスとか、その体力だったりとか、それこそバトン部って、衣装着たりとか体型維持じゃないけど、フィギュアスケートとか、ああいうスポーツっておそらく体力いるけど、でも維持しないといけないってなった時に、じゃあ栄養あって、でもカロリーというか、オーバーせずに、どんなもの食べればいいのかとか。でも、お菓子も食べたいし、じゃあ、どういう風に置き換えたらいいのかなとか。そういうのは、普段、結構気を付けた

りとかは考えることが多かったから、じゃあそれを何か学べたら、何か自分今やてることにも役に立つかもしれないし、と思ってる。っていう興味があって、最終的にここの栄養学をちよつと深く学んだかな、みたいな感じですかね。

—そこがすごい（笑）。

でも振り返ったらって感じなので、本当にその時は高校生の生活楽しんで、部活もやっぱりやったからやって。その三年生になったからね、次どうしようっていう時期があると思うんですけど、そんな時に自分のその時の興味って何かなって思ってたってたっていう感じなんです。今振り返ると今みたいに話せるんですけど、当時のその自分が高校生、二年生、三年生の時にそこまで考えられてたかって言われたら、全然そんなんじゃないんで。

—よかったよかった（笑）。ちょっと安心しました。

なので、日々興味持ったこととか、楽しいなって思うことを全力で今しか多分できないと思うし、環境も多分すごい立守はあると思うから。なんかやってもらったらいいかなって思う。

—じゃあバトンでこの学校入ったのがあって、今の仕事にまで繋がってるってことですね。

そうですね。私の場合はほんとにそうかなって思います。そのバトンも、今大学でも顧問をしてるので。めっちゃ関わってるから、ずっと繋がってるなっていう風には思うし。でも、それこそバトン部でがんばってることを、先生たちも、そんな時も応援してくれたりとか、サポートしてくれてた人もすごい多いんで。そういう環境が立守にあったから、今また自分もここにやっているかなっていうのもあるんで。

—すごい。そういう樋口先生とはどういう関わりなんですか？

樋口先生は自分が高校三年生の時の担任の先生。

―担任の先生！？そうやったんですね。

そうですね。その教育実習、私、スポーツの学部において、四年生の時に、教員免許もとれるコースに行ってたので、教育実習をここにきたんですね、その四年生の時に。そんな時も樋口先生いらっしゃったから、その担当というか、お世話してくださったって感じですよ。

―今日も梨奈さんと話すよって言っておられたので深い関係なんかなと思ってる。

そうですね。部活でしんどい時とかもそうですし、やっぱり樋口先生の明るい性格とかにはすごく助けられたかなって思います。さっき聞いたんですけど、今って担任というか、グループで担任なんですかね。

―はい。だから多分そんな関わりがなくて、担任の先生って言われても……。

授業だってそれぞれの先生ですもんね。昔は二年八組に樋口先生っていう感じで、二年九組に違う先生みたいな感じだったので、ほんとに自分のクラスに一年間。ずっと同じ先生なので、確かに関わりは深いかなと思いますね。

―さっき樋口先生に、部活で辛いことあったら相談してたみたいな。部活で辛いことって……。

何があったんやろ。あははははは。でもほんとどつちかというに通学の方が大変やったかもしれない（笑）。

―でもそんなに遠くても立守にしようって決めたんですよ。

うん。でもそれは良かったなと思いますね。いろんな友達、今までバトン部以外でも関わる友達もたくさんいるし。

―立守に来て正解やったっていうか……。

いや正解だったなって思います。ふふふ。

―ええ、そう言えるような高校生活になりたい（笑）。

今、学校生活はどんな感じですか？

―部活でもうメンタルがとにかく弱くて。さっきも、人前で……とか言ってたんですけど、メンタル鍛えるっていうか、そういうことってやっぱりされてたんですか？

いや、こうやって鍛えるっていうのはいけど。それはあれ？例えば試合で緊張するとか、そういうこと？

―緊張とかもあるし、ここミスったら、ていうのが一番かもしれないです。

いや、そういうところはもう私は全然メンタル弱い。本番に、そのバトンも、本番で落としたらダメとか、って思えば思うほどできないし。例えば大会で、じゃあ次落としたら全国進めないとか、そういうのになっちゃうと、自分もビビっちゃうってのはあって、すごいそれこそ一年生、二年生の時は、高校の。すごい、絶対失敗したらあかんとこで何回も失敗して、そういうのもあって。やのに、部長っていう自分もいるし、でも、全国もみんな目指したいし。でも自分は自分でやっぱ経験してきた経験値があるからこそ、多分決めないといけない時は決めないといけないしっていう、そのすごい三年間の中で葛藤みたいなのはめっちゃあったから。でもそのね、気持ちで頑張るっていうだけじゃあれだと思っんですけど、でも、その気持ちを言ったかも。友達とかに。

自分で一年生、二年生の時は、うん、抱えてたっていうか、自分はやらなあかんけど失敗したらあかんって、自分でモヤモヤしてたけど、それを同期少なかったけど、その子たちに、私は頑張らなあかんけどもう全然できてないっていうその弱音じゃないけど、を、吐いたのかな。多

分。ちゃんと吐いて、みんなにも、なんていうのかな、おもり背負わんでいいよっていう言葉とかに、安心した自分もいて、みたいなのはあったかなと思う。

—周りのつてことですよ。

それこそチームやし、そのバトンも、一人でやる競技もあるけど、団体でやることも多かったし、高校の部活としてはそうやってチームがメインでやってたので。団体として。だから、一人で仕事とかもそうなんですけど、やっぱ自分で考えちゃってしまうと、何も進まなかったり、失敗したらどうしようって結局なっちゃうと思うんですけど、みんなとやるから大丈夫だったとか、その自分の中で安心材料を少し、みんなに助けをもらってやるっていうのも大事なかなっていう風に思ってた。

バレーだと六人ですね、決まってるから。さっきも多いうて言ってたからね。大変だよ。試合に出れるとかに出れないとかもあったりするよね。

—てなると、樋口先生のあの明るさに本当にすごく助けて頂いていて。

チームが、この間もすごく試合とかで悪い雰囲気だった時に、樋口先生がめっちゃ笑って、チームを盛り上げてくださったって。

多分そういうところかな。私も多分そうやってずんってなってる時に、いけるよ、いけるよっていうこの元気な感じに、おそらく多分救われたっていうのもあるかなって。本当に先生方とも本当に良くしてもらってて、関わりがそれこそ深く関わらせてもらえてたから。今もこうやっていってるな、またこうやって立守戻ってこれたりとか。という関係性は先生方とも作れてるなっていうのはあります。

—距離感がとても近くて、話しやすい存在の人が多くなっている印象はありますね。

ぜひ、だから、先生方ともいっぱいコミュニケーションとつてもいいと思う。それこそ大学生になっても、先生たちここにいらっしやったら、絶対またそうやって相談、高校生じゃなくなっても相談もできると思うし、社会人としての先輩として。だから、本当に立守にあるものももう全部使って、友達もそうやし、先生もそうやし、ほんとにこういうパソコンとかもそうやし。全部使い倒して、行事とかも全部全力で楽しむと、楽しかったって絶対なると思うんで。

—そう言えるようになりたい（笑）。

いや、まだまだあと一年と、まだあとちょっと。まだ六月なんで。楽しくやってもらったらいいかなと。

昔と今を比べて

—六期生やからまだこの学校もちゃんとまだ成り立ってなかった、じゃあおかしいけどちゃんと整備されていなかったところとかあったんですか。

整備は多分ある程度はもう終わってたけど、でも本当どんどん変わってる。例えばバスケのゴール。あそこかもなかったし、普通に芝生だったとか。でも結構食堂とかもそのままだし、意外とそのままだって。まあだからなかったわけじゃないけど、その六期生の時も。そこからこの二十年かけて、色々新しくなってるものも増えてるんかなって感じですかね。

—多分その後のこの十四年ぐらいでまた色々変わったのかな。

そうそう、そんな感じだと思います。あと、制服も違ってきたから…

：

—え違いますか！？

制服って今選べるんですよ。

―選べます。これ多分青色なんですけど、青と白とピンクとかって、このセーター、ベストか。とかも色々色も選べて……。

それがもう普通に、別に選べず一緒のやつだったんで。

―セーラーっていうわけじゃすよね。

うん。ブレザーだったけど。何色って言ったらいんか分からないやつでしたね。だから、可愛くなったっていうのはありますね。ないかな、制服。(写真を探してくださっている)

―見てみたい。いつ変わったんでしょうね。制服。

制服いつ変わったかな。うん、五年ぐらい前かなあ。

―そんな最近なんですか。

ちよっと前かな。十年。それぐらいだったかな。(写真を見せてくださる) なんでこれ大阪にみんなにいるんかわからないけど(笑)。

―すごい！

このなんて言ったらいいかわかんない。

―でもリボンとかの感じは一緒じゃないですか。

今は一緒かも。エンジの色。

―スカートもこれ、これは灰色。紺ですか。

ここではない、緑みたいな。何色って言うんだろ。紺か。紺にちよつと緑みたいな感じ。

―このマーク、このブレザーのマークも違う気がします。

全部違うんだ。

―そんな変わることもあるんですね。

ね、制服は違う。でもほんと色味は同じ。男子女子も。うん、あんな感じ。色々喋ってたら本当変わってますねえ、結構。

*

―この自分たちでやるスタイルみたいな前は前からあったんですか。

自分たちでやるスタイルか。話し合いをしてくださいはあるかもしれないけど、それが主流っていう感じではなかったかもしれない。それこそ、社会に出るっていうために、待ちの姿勢だと、もう何も変えられないから。自分たちで気づいたこととか問題提起してやっていくっていうのが多分大事なんだろうね、きっと。

―やっぱり感じますか。

社会で出ててもそうですね。待つとくだけだと仕事はあるとは思いますが、全然広がり方も違うと思うし、やっぱ自分で考えて……でもみんながやってることと一緒に思います。何に興味持ったり、これが問題かって思ったことに対して、じゃあどうやってたら解決できるかっていうのを、一人じゃなくて、そうやってみんなと考えてやるっていうことはめっちゃ大事かなって思うんで。それをでも、今からできてるってのは、めっちゃめっちゃ身についた状態で社会に出ると、社会出たらそれをやるよりは全然違うかな。だから、すごいと思うよ。大変やと思うけど。

―うん、大変やけど、将来に生きてくことを信じて頑張ってるっていいかない。

うんうん。いや、私が六期生で今二十だから、十四年くらい、後に多分語ってるって考えたらすごい。ね、どんな風に語ってるんかなって思うよね。

―ええーもう全然、もう未来とか考えられなくて。

本当、今のこの立守が、今やってることを全力でやってたら、きっとまた振り返った時によかったって思えるので。そうやって、勉強もそう

やし、部活も頑張ってやってもらったらいかなと。だから、ほんとに立守に来てよかったなっていう感じかな。

＊

今日はオフなのに、ありがとう。

ーいや、こちらこそありがとうございました。

ぜひまた。そっか。バレーボール部だったらまた、樋口先生からも聞けるから。頑張った活躍とかはね、聞けるとね。また頑張ってください。

ーはい。頑張ります。

【感想】

私はよく部活の試合などで緊張してしまうことが多いが、梨奈さんとお話をして友達に本音を吐くなどして自分の中で安心できるようなことを増やしていくことで心を落ち着かせることができて自分の実力を発揮していくことができると分かった。立守では何事にも主体的に取り組むことを大切にしていて、私は自分で考えてそれを実践していくという事が苦手だけど、社会に出てその力が必ず生きてくるというお話を聞かせていただいたのでこれからの学校生活ではその力を伸ばしていけるように意識していきたい。



右：語り手 嘉本 梨奈さん

左：聞き手 嶋本 結衣